法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

父なる祖国、母なる言語(2)ハイネとドイツ

内田，俊一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
111
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
18
(発行年 / Year)
2000-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004830

Hosei University Repository

父なる祖国、母なる言語（2）

――ハイネとドイツ――

内田俊一

Ⅱ

ハイネは、パリ亡命後の一八三三年に、生涯にわたる友人で助言者でもあったファルンハーゲンに宛てて、こう書いている。

しかし私がかつて武器を手に取ったとすれば、それは他者の嘲笑と、出生をめぐる傲慢な思い上がりによって強いられたためです。――私の全生涯にわたる行軍の道筋は、すでに揺り籠の中で決められていました。[16]

その揺り籠は、父ザムゾン・ハイネと母ベティー・ハイネ（旧姓ファン・ゲルデルン）によって構成される、デュッセルドルフのユダヤ人家庭に置かれていた。ハイネは、自分がユダヤ人であることを初めて意識した（あるいは、意識させられた）日のことを、『メモワール』の中に書き残している。彼はある機会に、自分の祖父がどんな人物だったのか、父に尋ねた。無口な父親は半ば笑いながら、半分ばつっけんどんにこう答えた。「おまえのお

Hosei University Repository

じいさんは小柄なユダヤ人で、長い鬚をはやしていたさ。」次の日彼は学校で、全く無邪気にこの重大ニュースを級友たちに話して聞かせる。するとこの「ちびのユダヤ人で長い鬚のおじいさん」という言葉は、級友たちの口から口へと、リフレインのように飛び移っていき、ついには上を下への大騒ぎになってしまった。これを聞きつけた担任の教師が、怒りで顔を真っ赤にしながら駆けつけてくる。そして結局ハイネは、この騒ぎの全体を引き起した張本人として、笞打ちの罰を受けることになってしまったのだと。[17]

ハイネは、彼に罰を加えた、フランシスコ会修道院学校のこの教父の名を、生涯忘れなかった。『メモワール』の記述は、この体験が彼の心に、いかに深い傷を刻んだかを物語っている。だがしかしこの体験は、ドイツのユダヤ人にとって、きわめて新しい事柄に属していた。なぜならハイネ以前の世代には、ユダヤ人の子供がキリスト教徒の子供たちと同じ学校で学ぶという状況は、ありえないものだったからである。そもそも少年ハイネが、自分のユダヤ人の祖父のことを得意満面で言い触らしたということは、ユダヤ人であることが何を意味するのかを、この少年が知らなかったということ、あるいはそれまでは知らずに済んでいたということを示しているのであって、彼は、このような形で自らのユダヤ性を意識させられた、おそらく最初の世代に属していた。彼の「ユダヤ人」体験は、中世的なカースト的差別の影を引きずる、前世代までのそれとは異なり、ユダヤ人の解放と同化以後の、それにもかかわらず残された（あるいは、そうであるがゆえに新たに生み出された）差別の刻印を受けている。それはむしろ、現代にまで続く、のちの世代の「ユダヤ人」体験に近く、その最初の事例だと言えるかもしれない。

ハリー・ハイネ（ハイネがハインリヒという名を名乗るのは、一八二五年のプロテスタントへの改宗以後のことである）は一七九七年、当時ベルク公国の首都であった、ライン川沿岸の町デュッセルドルフに生まれた。ハイネの育った時代は、ナポレオンのフランスと他のヨーロッパ諸国の間で、絶え間なく戦が交わされた時代であり、その勝敗によって各国の版図も、目まぐるしく変化した。ベルク公国を含むライン地方は、一七九五年から一八〇一年までと、さらに一八〇六年から一三年までの二度にわたって、フランスの統治下に置かれた。その結果、当時としてはきわめて進歩的なナポレオン法典が導入されたことによって、政治的な意味でのユダヤ人解放は、ほぼ完全

Hosei University Repository

に実現した。ユダヤ教徒の集団も、カトリック教徒やプロテスタント教徒の集団と並んで、対等の位置に立つことが、少なくとも理論的には、可能になった。ハイネが生まれた当時、デュッセルドルフの町には、ゲットーも、明確に区分されたユダヤ人居住区も、存在しなかったらしい。（彼がフランクフルトの町を訪れて、初めてゲットーというものを目のあたりにしたのは、十七歳の時のことだったし、そこで生まれたルートヴィヒ・ベルネに伴なわれて、その暗黒の空間を隅から隅まで探索し、改めて強烈な印象を受けたのは、二十代も終わりに近づいた頃のことだった。[18]）おそらくそれも、大革命後のフランスによる統治が、影響を及ぼした結果だったのだろう。ハイネの母は、長男ハリーを始めとする三人の息子を、全員キリスト教系の学校に通わせているが、[19]これはおそらく、ドイツのユダヤ人としては、最も早い事例のひとつだっただろう。そしてそうであったからこそ初めて、ハイネの学校での体験のようなことも、成立しえたのである。

ナポレオンが敗退し、ライン地方がプロイセン領になると、ユダヤ人の政治的同権は取り消され、旧来の様々な制限が復活することになった。これは、少年ハイネの進路にも、影響を及ぼさずには済まなかった。母は、彼が将来官僚ないし軍人として出世してくれることを夢みて、それまで彼を高等中学校（リュッツェーウム）に通わせていたのだが、卒業まで一年を残して、実業学校に転校させる。[20]ユダヤ人に対して公務への道がふさがれたからには、商人ないし銀行家にするしかないと、その時彼女は考えたのである。後年彼は、ゲッティンゲン大学法学部の卒業を間近に控えて、キリスト教に改宗する。それは、公務ないし弁護士の職に就くための前提条件として、どうしても必要だったわけだが、もしナポレオン支配が続いていたとすれば、そのような屈辱は味わわずに済んだはずである。ハイネのナポレオン賛美とプロイセン憎悪の起源を、ここに見ることは可能だろう。

ハイネの政治的批判の源泉が、プロイセンを始めとするドイツ連邦諸国における、ユダヤ人解放政策の逆行にあった――自らの怒りがどこから生じているかについて、彼はきわめて寡黙であって、けっして公言しようとはしないのだが――ことは、疑いを容れない。ユダヤ人の政治的同権が、フランスにおけると同様に、勝ち取られなければならない。しかし彼は単なる「フランスかぶれ」ではない。そもそも彼のユダヤ人としての原体験は、『メモ

Hosei University Repository

ワール』中の言葉によれば、「フランス人によって支配されたばかりでなく、フランスの精神によっても支配された町」[21]デュッセルドルフで、起きていたのである。たとえ政治的な意味での解放、同権の付与が実現したとしても、それで問題が解決したことにはならない。ユダヤ人にとって問題は、また再び新たな形をとって生じてくるだろう。そのことをハイネは、同権が撤回されたことによって、政治的解放以前の状態に逆戻りしたドイツにおいて、つまりこれからまず政治的解放が勝ち取られなければならないドイツにおいて、意識せざるをえなかった。そしておそらくこれが、彼の政治的見解に複雑な屈折を与え、一見分裂しているかに見える発言につながっている。

ハイネはすでにデュッセルドルフ時代から詩を書いていた。しかし彼の詩作が本格化するのは、銀行家としての見習修業のために、ハンブルクに住む叔父ザーロモン・ハイネのもとに送られた、一八一六年以降のことである。一八一七年二月「ハンブルクスヴェヒター」誌上に、初めて彼の詩が印刷された。「二つの愛の歌 zwey Lieder der Minne」と題されたこの作品は、Sy. Freudhold Riesenharf なる筆名のもとに発表された。この「誇大妄想的」[22]な筆名（Riese は「巨人」の意である）は、Harry Heine Dusseldorff のアナグラムである。ユダヤ人銀行家ザーロモン・ハイネの名が知れわたっている町で、ハイネという姓を名乗って、詩を発表するわけにはいかなかった。すでに前年の十一月に親友ゼーテに宛てた書簡の中で、彼は自作の詩を印刷に付したいという希望を述べながら、同時にハンブルクの町の空気に潜んでいる反ユダヤ主義を示唆し、作者として本名を出すわけにはいかないと述べていた。「キリスト教徒の愛が、ユダヤ人の作った愛の歌を、槍玉にあげずにはおかないということは、容易に予想がつく」[23]というのである。彼が中世的色彩を帯びた愛（Minne）を歌うことは、ユダヤ人がキリスト教的・ドイツ的文化領域に侵入することを意味した。作品の何らかの特徴が、自分のユダヤの血統と結び付けられはしないかという不安は、若き日の彼に終始つきまとう強迫観念だが、それはすでにこの詩人としての最初の登場の時から、刻印されていた。

公表された最初の詩が、すでに愛の詩――と言うよりも、愛の対象との調和に満ちた合一の不可能を歌う詩――

Hosei University Repository

だったということは、象徴的と言えるだろう。一般に、この二篇を含む初期の恋愛詩は、叔父ザーロモンの娘たち、つまりハイネの従妹アマーリエおよびテレーゼとの恋愛体験と結び付けられている。もちろん、きっかけはそこにあっただろう。しかしそれは単にきっかけにすぎない。深く愛している相手から、けっして愛し返されることがないという体験は、彼にとってこれらの恋愛が初めてのことではなかった。それが何であったかは、詩の公表をめぐるハイネの憂慮が物語っている。すぐそこにありながら、けっして手の届かぬ世界が、二人の女性の内に人格化され、そのようなものとして彼は恋愛を体験した。彼の恋愛詩においては、最初から、私的・性的な要素と社会的な要素が結び付いている。ハイネの伝記を彩る女性の数は、きわめて少ない。しかもその関係は、きわめて希薄である。二人の従妹との関係にしても、単なる片思いの域を出ない。彼が肉体的に関係を持った女性は、娼婦かそれに類した女たちばかりであって、のちの妻マティルデにしても、その範疇に含めることができる。本当の意味で恋愛と呼べるのは、最晩年の身動きひとつできぬ、いわゆる「しとねの墓穴」で知り合い、自ら皮肉を込めて「健康的な愛」[24]と呼ぶ、プラトニックな感情で結ばれた、「蠅（ムーシュ）」カミラ・セルダン（本名エリーゼ・クリーニッツ）との関係だけだったかもしれない。「きわめて放埒と思われているが、実際にはきわめて内気な」[25]、ハイネというこの恋愛詩人は、恋愛を成就することの最も少ない、あるいはそれの不可能な人物だった。金銭によってしか女性との関係を持てないハイネを、金銭によってしか社会とのつながりを持てない、ロスチャイルドを始めとするユダヤ人富豪たちと比較することも、その気になれば不可能ではないだろう。

ハイネの苦しみの原因は、恋愛事件によって初めて生み出されたわけではない。それは最初から存在していた。彼は『イデーエン　ル・グランの書』（一八二七年）の結びに、こう書いている。

> 惨めさが、身中の虫のように、私の心に穴をうがちました。……私はこの惨めさとともに、この世に生まれてきたのです。それはすでに私と一緒に揺り籠の中に寝ていました。そして母が私を揺すると、それも一緒に揺られ、母が歌って私を眠らせると、それも一緒に眠り込み、私が目を開けると、それも目を覚ましたのです。私が

Hosei University Repository

大きくなると、惨めさもまた成長し、そしてついにはすっかり大きくなって、張り裂いてしまったのです、私の――[26]

だがしかし、彼の苦しみの原因であるこの惨めさは、彼の体内に、つまり「血」の中に、あったのではない。そうではなく、それが「血」の中にあると思い込ませ、そのことによって、原因が有史以前にまで遡るかのような幻影を生じさせる、ひとつの力ないしパラダイムに、それは内在していた。そしておそらくそのパラダイムは、揺り籠を揺すった母、つまり詩人ハイネを生んだ母語と、切り離すことのできない関係を有していた。

開始されたばかりの、銀行家ないし商人としてのハイネの経歴は、だが商売に身が入らない彼の性格と、時代の波に乗りきれなかった父ザムゾンの破産のために、あっけなく幕を閉じる。資本がない以上、社会的上昇は学歴によるしかない。彼は叔父ザーロモンに学資を援助してもらい、官僚ないし弁護士を目指して（もちろんそのために不可欠な改宗が視野に入っていた）、一八一九年秋、ボン大学法学部に入学する。だがその後ゲッティンゲン大学からベルリン大学、また再びゲッティンゲン大学へと、転学を繰り返し、結局卒業までに六年を要したことを見ても、法律の勉強に身が入らなかった様子が窺える。彼の関心は、文学に向かっていた。すでにボン時代に、先に引いた処女評論「ロマン主義」や数々の詩が書かれているが、なんといっても彼の創作が本格化するのは、ベルリンに移って、ファルンハーゲン夫妻やエリーゼ・フォン・ホーエンハウゼンのサロンに出入りし、そこで様々な文学者や知識人を知った、一八二一年春以降のことである。

この年の暮には、彼の初めての本として『詩集』が出版される。これは、大部分がすでにハンブルク時代に書かれた作品であり、またそのほとんどが恋愛詩である。のちに彼の親友となるカール・インマーマンは、まだ彼と知り合う以前にこの詩集を読み、次のように評していた。「詩人の胸を動かしたものは、愛の不満よりも辛い何かであって、悪しざまに言われている可哀そうな娘は、他人の不正の償いを強いられているように、私には思える。」[27]

Hosei University Repository

彼の恋愛詩の底に何が横たわっているか、この彼の詩人としてのデビュー作の時からすでに、読む者は読んでいた。だが、のちに「ハイネ調」と呼ばれることになる、共感と皮肉の交錯した様式を生み出し、彼の詩人としてのスタイルを確立したのは、なんといっても、一八二二年から翌年にかけて作られ、一八二三年春に二篇の悲劇とともに、彼の二冊めの本として出版された「抒情挿曲」だっただろう。次第に彼は詩人として注目を浴び、「ドイツのバイロン」などと呼ばれるようにもなる。

だが同時にこの時期の彼は、生涯において最も「ユダヤ的なるもの」に接近する。ヘーゲル哲学の影響を受けたユダヤ人法律学者、エードゥアルト・ガンスと知り合った彼は、ガンスが会長を務める「ユダヤ人文化・学術協会」に参加（一八二二年八月）し、協会の学校で自ら歴史やドイツ語、フランス語を教えたりもする。ドイツ語で書く詩人として一応の地歩を固め、文化的・言語的な意味での同化が成し遂げられたかに見えた時、その時初めて、ユダヤ人としての自意識が彼に生じるのである。ただし、そこで意識される自己は、現にここに存在する自己ではなく、あるべき自己、もはや取り返しのつかぬ過去として思い浮かべられ、理想化されたユダヤ人の自己である。一八二二年暮に書かれた論文『ポーランドについて』では、そのように理想化された自己が、未だに伝統的生活様式の中に生きる（と彼には見えた）ポーランド・ユダヤ人たちに投影されている。そこでハイネは、彼らをポーランドにおける「第三階級 tiers état」と規定し、こう述べている。

> ポーランド・ユダヤ人の頭を覆う野蛮な皮帽子にもかかわらず、そしてその頭を満たす、さらに野蛮な考えにもかかわらず、私は彼らのほうを、ドイツの多くのユダヤ人などよりも、はるかに高く評価している。……汚い毛皮をまとい、シラミの住みついた鬚を垂らし、にんにくの臭気を発散し、ユダヤ言葉を話すポーランド・ユダヤ人のほうが、国債証書の栄光に包まれた連中などよりも、私には今なお好ましく感じられるのだ。[28]

東方ユダヤ人のこの理想化には、百年後のカフカにおけるそれを思わせるものがある。

Hosei University Repository

ハイネにおけるユダヤ人アイデンティティのこの意識化の過程は、ドイツにおけるユダヤ人解放の逆行と、パラレルに進行した。プロイセンの宰相ハルデンベルクの名を冠して呼ばれる、一八一二年のユダヤ人解放令は、一部のリベラルな官僚によって構想されたものであって、そこに大衆の支持はなかった。ナポレオンが没落し、一八一四／五年のウィーン会議によって反動化の波が始まるとともに、ユダヤ人に対する旧来の制限が次々と復活していく。一八二二年のプロイセンの国王勅令では、大学を含む教職へのユダヤ人の登用までもが、再び禁止された。[29] 公的地位に就くことによる生活の安定と、自らの文学への志向との間を調停するものとして、大学における教職を念頭に浮かべつつあったハイネにとって、これは特に大きな意味を持っていた。従ってハイネの「ユダヤ的なるもの」への接近は、むしろそのような、ユダヤ人排除に傾いた、外的状況に強いられた結果だと言うこともできる。ユダヤ人に対する同化と排除の圧力は、手を携えながら進行する。それは、同化の圧力が強まれば排除の圧力が弱まり、逆に排除の圧力が強まれば、同化の圧力が弱まる、といった相互関係にあるのではない。むしろ同化の圧力が強まれば強まるほど、排除の圧力もまた強まるのである。

ハイネは、協会の機関誌に論文を書き、そこで「ユダヤ人の大いなる苦悩（ベルネが言っているような）[30]」について語ろうと計画する。この計画が挫折したのは、彼の健康状態のためばかりではなかっただろう。むしろ、どうしても消化することのできない内面の矛盾が、健康の悪化を惹き起こし、論文の執筆を妨げたと捉えるべきである。一方で彼はユダヤ人、自らの内面で理想化された「ユダヤ人」たらんと希求する。しかし他方で彼は、自らをドイツ人、中途半端な「ドイツ人」として意識せざるをえない。ユダヤ人アイデンティティの意識化は、むしろ彼にアイデンティティの分裂をもたらした。先に引いたドイツ語に対する愛憎に引き裂かれた二通の書簡は、まさにこの時期に書かれているのである。ついでに言えば、この時期の彼のアイデンティティをめぐる苦悩と、他方における詩人としてのスタイルの確立とは、けっして無関係に進行したのではない。「抒情挿曲」から「帰郷」の詩群（一八二三／四年）へと、ますます皮肉の度を強め、尖鋭化していく詩作品には、彼の内面の分裂がくっきりと刻印されている。

Hosei University Repository

この時期のハイネが、協会の活動との関わりを通じて、ユダヤ人アイデンティティ確立のために構想した最大の作品は、だがなんといっても『バッヘラッハのラビ』だった。彼は、中世のユダヤ人の歴史を素材とするこの小説を、協会を通じて知ったレーオポルト・ツンツの歴史研究に比肩しうるような、資料的価値を持つ作品に仕上げたいと思った。中世ドイツの暗いゲットー生活の描写に、追放以前のスペインに花開いた、ユダヤ文化の精華をも対比的に取り込みながら、反ユダヤ主義や改宗の問題をテーマ化することによって、彼は、自らのユダヤ人アイデンティティに歴史的裏付けを与え、かつまた同時に、ドイツの文学世界に、これまで全く知られていなかった分野を開拓しようとした。それはいわば、ユダヤとドイツへのアイデンティティの分裂を調停する、ジンテーゼとして構想された。一八二四年四月に、転学先のゲッティンゲンから休暇を利用して一時ベルリンに戻って滞在し、協会の仲間たちと再会した折に、執筆への決断が下されたと推測されている。[31] 第一章は、その年の五月から七月にかけて書かれた。彼はすぐに第二章以下の準備に取りかかるが、しかし実際の執筆までには、ほとんど丸一年を要した。

この――彼にとって、おそらくは決定的な時期だった――一年間の時間差によって、だがこの作品には、深刻な分裂が持ち込まれることになった。第一章は、あくまでも資料としての信頼性を保持しながら、中世ドイツ・ユダヤ人の歴史を記述するものとして構想され、その執筆のために彼は、ゲッティンゲン大学図書館で広範な歴史書を渉猟した。物語の舞台としては、彼が育ったライン川中流域が設定され、過越しの祝いの描写に見られるように、自らのユダヤ人としての幼年時代の記憶も、そこに織り込まれた。自伝を書こうとする意欲は、ハイネの生涯を貫く情熱となっていくのだが、[32] マンフレート・ヴィントフーアは、この『ラビ』が、そのための引き金になったと見ている。[33] きわめて真面目な意図のもとに構想されたこの第一章の文体と、滑稽な人物群を登場させる第二章以下の風刺的で皮肉な調子との間には、明らかに違和感がある。第二章以下の持つ雰囲気は、むしろ、その間（一八二四年十／十一月）に執筆され、彼に散文の分野における新たな可能性を開き、一八二六年の出版によって彼の出世作となる、『ハルツ紀行』のそれに近い。第一章と第二章以下の間のこの分裂は、その間に、「ユダヤ的なるもの」への接近をめぐって、彼になんらかの変化が生じたことを物語っている。そしてそれが結局、この作品の完成を不可

Hosei University Repository

能にしてしまうのである。『ラビ』第二章の執筆と第三章の構想の作成は、一八二五年五／六月と十月に行なわれた。つまりそれは、彼のキリスト教改宗への準備と、ほぼ並行して進められたのである。

キリスト教への改宗は、彼が法学部の学生となった時から、すでに予定に組み込まれざるをえなかった。公務に就くのは無論のこと、弁護士としての開業さえも、ドイツ連邦を構成するほとんどの国々では、キリスト教徒にしか許されていなかった。それにもかかわらず、彼は躊躇し続けた。一八一三年九月に友人モーゼス・モーザーに宛てた書簡には、こうある。「家族の誰ひとりとして、それに反対してはいない。私を除いては。[34]」しかし法律で生計を立てるつもりならば、どうしてもこれを避けて通るわけにはいかなかった。法学博士の学位取得を目前に控えた一八二五年五月二十四日、彼はゲッティンゲン近郊のハイリゲンシュタットの教会を訪れ、自らの改宗への願いを牧師に告げる。自分の顔が知られているゲッティンゲンではなく、誰にも知られていないこの町で、洗礼を受けたいのだと。しかも、自分がユダヤ人の両親から生まれたことが公になり、ユダヤ教から離れたことでかえってユダヤ人と呼ばれ、改宗ユダヤ人という名を奉じられるなどということのないように、秘密裡にそれを行ないたいのだと。[35]六月二十八日、彼はハイリゲンシュタットの牧師グリムの手によって洗礼を受け、クリスティアン・ヨーハン・ハインリヒという名を与えられた。この時初めて、「ハインリヒ・ハイネ」が誕生したのである。

ハリー（Harry）はハインリヒ（Heinrich）となった。のちにハイネは『ルッカの温泉』（一八二九年）の中で、ヒアツィント（Hyazinth）と名を改めた改宗ユダヤ人ヒルシュ（Hirsch）の口を借りて、こうした改名には長所があるのだと述べさせている。すでに印章に彫り込んであるHの文字を、新たに彫り直す必要がないという長所が。[36]だがこの改名が、いかに屈辱と意識され、心に深い傷となって残ったかは、次のエピソードが物語る通りである。ドイツ連邦議会の決議によって著作・出版を禁止された（一八三五年）ハイネは、一時期、母の幼名を使っての出版を考えたことがあった。その時期に彼は、出版者カンペに宛ててこう書いている。「しかし新たな名を名乗ることには、不愉快な点もあります。それは屈辱的な譲歩です。[37]」さらに一八四〇年、ベルネ論の著者名として、

Hosei University Repository

カンペが誤ってHeinrich Heineというフルネームを印刷させてしまった（それまでは常にH. Heineと記されていた）時、ハイネはカンペに宛ててこう書いた。「なぜかは分かりませんが、省略なしの私の名ハインリヒを目にした時、私はショックを受けました。[38]」

彼は改宗の事実を、家族や、きわめて限られた範囲の友人にしか告げなかった。それも、ほとんど暗号めいた、遠まわしの表現で。一八二五年七月三十一日付の妹宛の手紙には、こう書かれている。「お前のご主人にも、よろしく伝えてほしい。そして彼がおしゃべりではないということに確信が持てるならば、こう伝えてくれ。私が今では単に法学博士であるばかりでなく、また――。六週間前と同じように、昨日も雨が降った。[39]」ベルリンに住む親友のモーザーには、書き上げたばかりのロマンツェ「アルマンゾル」の原稿を送り、こう付け加える。改宗がテーマとなっているこの詩を、自分は『ラビ』の中に挿入するつもりだ。ある改宗したユダヤ人が、自分の改宗の事実を、友人に対して間接的に知らせる場面に。「というのも、あまり高潔とは言えない行為について、あからさまに友人に書き送るのは、気が引けるかもしれないからだ。[40]」あとは推測してほしい、というわけである。『ハルツ紀行』の結びでは、彼はきわめて婉曲な表現で、事情を知るごく少数の読者に向かって、自らの改宗への理解を求めている。彼はハルツ山地のイルゼ岩の頂上から足をすべらせた。「そしてもし、心の苦しみにかられて、鉄の十字架にしがみつかなかったならば、私はきっとめまいに襲われて、深淵に落下したことだろう。私が苦境に陥ってそんなことをしでかしたのを、誰も悪く思いはすまい。[41]」

彼は改宗を後悔する。十二月十九日にはモーザーに宛てて、こう書いている。「もし法律が銀の匙を盗むことを許してくれていたら、私は洗礼なぞ受けなかっただろう。[42]」（「銀の匙を持って生まれてくる」とは、貴族として生まれることを意味する。ただしハイネがこう書いた時、彼の念頭にあったのは、おそらくロートシルト（ロスチャイルド）家の人々のことだっただろう。彼らは当時も、それ以降も、けっしてキリスト教の洗礼を受けなかった、あるいは受ける必要がなかった。）改宗によって、彼は深く傷ついた。だがその傷は、いったいどこから生じていたのだろうか。純粋に宗教的な面で言えば、彼にとってこの改宗は、ほとんど意味がなかっただろう。ユダヤ人文

Hosei University Repository

化・学術協会の活動に参加していたとはいえ、宗教としてのユダヤ教には、彼は重きを置いていなかった。だとすればこの傷の原因は、自らの意志に反して膝を屈しなければならなかったという屈辱感にあっただろう。さらにこの改宗によって、改宗しない、ということはつまり市民社会から排除されたままの、ユダヤ人大衆に背を向けて、自分ひとりだけは宿主社会に受け入れてもらおうと、おめおめとそれにすり寄る行動をとってしまった、という罪責感も加わっていたに違いない。だがそれだけではなかった。

そもそも宗教が意味を持たないのは、ハイネにとってばかりではなかった。たしかに法律上では、宗教による差別が残っていた。しかし法律というものは、実社会の動きに一歩遅れて従っていくものであって、この時期の社会においては、宗教はすでにほとんど意味を失なっていた。ユダヤ教徒への差別は、プロイセンでは、いったん撤廃されたのちに、また復活するわけだが、しかし復活した時には、おそらく意味が変わってしまっていた。と言うよりも、意味は変化しているのだが、それに対する新たな法律的表現が見出せず、結局旧来の法律を復活させるほかなかった、ということなのだろう。宗教が問題とならなくなっていることを、何よりも雄弁に物語っているのは、改宗の際のハイネの不安である。彼が心配しているのは、ユダヤ教を捨てることによって、ユダヤの血統が公になり、それ以後かえってむしろユダヤ人と呼ばれることになるのではないか、ということなのである。ユダヤ教を捨てた時に、ひとはむしろ初めて「ユダヤ人」となるのだ。

ゲッティンゲンでは、彼がユダヤ人であることは知られていなかった。彼が最終的な大学卒業（それには、改宗の予定もプログラムに組み込まれていた）の地として、ユダヤ人であることが皆に知られているベルリンではなく、わざわざゲッティンゲンを選んだのは、ベルリンのユダヤの友人たちに、自分の改宗の事実を知られまいとする配慮からだったのだろう。そして彼はゲッティンゲンでは、自分の改宗の事実を、つまり裏返せば、自分がユダヤ人だという事実を、キリスト教徒たちに知られまいとする。つまり彼は、ユダヤ人たちからは、自分が以前と変わらず、ずっとユダヤ人のままであると思われたいと願い、ドイツ人たちからは、自分が以前と変わらず、ずっとドイツ人のままであると思われたいと願っている。しかしこれは、無理な願望である。ユダヤ人とドイツ人を、そ

Hosei University Repository

れぞれ民族として実体化することが、常識となってしまっている現代の目から見れば、ほとんど馬鹿馬鹿しいほど無理な願望である。ユダヤ人でありながら、ドイツ人であることが可能だと信じられていた、あるいはそのような信念に、まだ期待がかけられていた当時の目から見ても、やはりこれには無理がある。そもそも彼は、ユダヤとドイツを重ね合わそうとしているのではなく、ユダヤ人たちにはユダヤの顔を向け、ドイツ人たちにはドイツの顔を向けようとしているのだから。

それでもしかし、この彼の心の動きは、『バッヘラッハのラビ』において、ユダヤ・アイデンティティの確立に努めながら、ドイツ文学に新境地を開こうとした時の、彼の心の動きとつながっている。高邁な理想であったはずのものが、現実の社会行動の中に置かれると、惨めな右顧左眄として結果するしかなかった。彼の行動の薄汚なさを、彼ひとりの罪に帰すわけにはいかない。問題はむしろ、彼の心の動きを、そのような卑怯な行動として現象させるしかない社会に、あるいはその社会に内在するパラダイムに、あるのだろう。いずれにせよこの時期のドイツで、改宗の問題に直面させられ苦しんだのは、ハイネひとりではなかった。ハイネの改宗の直後には、ユダヤ人文化・学術協会の会長だった法学者エードゥアルト・ガンス自身が、ベルリン大学の教授職を得るために改宗する。これによって協会の挫折は決定的となるが、ハイネは自らの改宗の事実を隠したまま、ガンスの行動を非難する。もちろんそこに、彼の自己批判が入り混っていたことは間違いない。

ユダヤ人からはユダヤ人と思われ、ドイツ人からはドイツ人と思われたい、という彼の願望とは裏腹に、改宗は全く逆の結果を惹き起した。つまり一方において彼の不安は的中し、ドイツ人たちからは改宗ユダヤ人と見なされることになり、他方でユダヤ人たちからは、ユダヤ人を裏切った似非ドイツ人と見なされる――そのように彼を非難した最大の人物は、ガンスへの批判を通して自分自身を告発する、ハイネ自身だった――ことになった。彼は一八二六年一月、つまり改宗の半年後に、モーザーに宛てて「私は今では、キリスト教徒にもユダヤ教徒にも憎まれている」[43]と書いている。もちろん彼を最も憎んでいたのは、キリスト教徒でもユダヤ教徒でもない、彼自身だっただろう。彼は今や、ドイツ人でもなければユダヤ人でもなく、何者でもなかった。改宗によって彼が負った心の傷

Hosei University Repository

の最大の原因は、おそらくここにあった。

このアイデンティティの分裂、ないし不在が、『バッヘラッハのラビ』の完成を不可能にした。この作品に、彼は「ユダヤ的なるもの」への自らの愛の全てを、注ぎ込もうとした。第一章を書き終え、その続きを構想しつつあった一八二四年十月二十五日に、彼はモーザーに宛ててこう書いている。「言葉に尽くせぬ愛とともに、私はこの作品全体を胸に抱いている。だってそれは、名声を求める虚栄心からではなく、そっくり丸ごと愛から生まれたのだから。」[14] この作品が彼にとって持っていた意味は、他の作品の場合とは全く違っていた。それには彼の全存在がかかっていた。そのようなものとして、それは彼の代表作となるはずのものだった。まさにそうであったがゆえに、彼は書き続けることができなくなる。洗礼の準備を具体的に考えつつあっただろう一八二五年四月に、彼は「『ラビ』のことが心に重くのしかかっている」[15]と漏らす。「一行一行戦い取るようにして書いている」[16]というのが、『ラビ』の原稿について彼が書いた最後の言葉だった。

自らのユダヤ人アイデンティティに歴史的裏付けを与えようとして書かれた、第一章の厳粛で痛切な雰囲気は、すでに改宗の手続きに入った時期に執筆された第二章の、風刺的で皮肉な雰囲気に取って代わられる。そこにはすでに、彼のアイデンティティの分裂が反映している。さらに、執筆そのものは後年に行なわれたが、構想はすでに一八二五年十月、つまり改宗直後に作られたと推定されている第三章では、スペイン生まれの改宗ユダヤ人ドン・イサーク・アバルバネルなる人物が登場し、風刺的・嘲笑的気分はさらに強まる。歴史的資料に基づく、つまり事実に基づく、歴史小説として構想された以上、自らの改宗にともなって、ハイネはどうしても改宗ユダヤ人の形姿を、それも改宗を弁護できる形で、登場させないわけにはいかなかっただろう。しかしそれは、第一章の基本的コンセプトに矛盾する。この作品は、永遠に断片としてとどまるほかなかった。十五年を経た一八四〇年、ダマスカスで反ユダヤ暴動が発生し、しかもそれに、(彼が住む)フランスのダマスカス駐在領事が一役買っていたことを知った彼は、怒りにかられてこの原稿を、未完のまま出版することを決意する。彼は出版者カンペには、原稿が未

Hosei University Repository

完にとどまっている理由を、一八三三年にハンブルクの母の家で起きた火災のために、焼失したのだと説明する。出版されたテクストの、中断された第三章の末尾に置かれた断り書きは、このようなものである。「この結末とそれに続く数章は、著者の落ち度によってではなく、失なわれてしまった。[47]」だがもちろんこれは、彼一流の韜晦ないし虚言にすぎない。この先を書き続けることは、彼には不可能だった。

彼が心血を注いだ『ラビ』は流産し、その代わりに生まれたのが『ハルツ紀行』だった。それはなにも、『ラビ』第一章と第二章の間に書かれたという、時間的理由によるばかりではない。『ラビ』第二章の雰囲気に似た、風刺的で皮肉な調子に貫かれたこの作品には、彼の内面の分裂が色濃く反映している。それは、「抒情挿曲」から「帰郷」に至る、彼独特のスタイルを確立した詩作品とも、共通する要素を持っている。『ハルツ紀行』は、そのような要素や、また、一見無秩序の印象を与えるが、その実きわめて入念に計算された、観念連合による進行によって、彼の散文のスタイルを確立する作品となった。『ラビ』の場合とは違って、彼はこの作品に重きを置かず、ほんの軽い気持ちで書いたにすぎなかっただろう。しかしこの作品こそが、散文作家ハイネを決定づけるものとなったのである。おそらく『ラビ』の挫折は、彼の改宗によって初めて惹き起こされたのではない。それはその構想の中に、最初から組み込まれていた。生真面目な歴史記述的文体によるならば、彼は公定ドイツ語の意味体系に引き込まれ、そのパラダイムにがんじがらめにされるだろう。そのパラダイムと同じ思考様式で、考えるほかなくなるだろう。ドイツ・ナショナリズムと同じ思考様式で綴られたユダヤの物語は、結局それと瓜二つのユダヤ・ナショナリズムを生み出すだけだろう。しかしそれは不可能でもあり、彼の望んだことでもなかった。その内的脈絡によって、『ラビ』は挫折したのである。彼がとるべき道は、本来、公定ドイツ語の意味体系を破壊し、それを新たに組み直す、観念連合による構成以外にありえなかった。

歴史は、実はきわめて新しい「国民」の観念を、過去に投影して物語ることによって、それが有史以来ずっと存在してきたかのような幻影を生み出す。一本の糸のごとく、過去から連綿と続いてきたかのような錯覚を与えることによって、それは国民をひとつに結び合わせる。そのようなものとして、歴史は、国民国家の観念を支える、最

Hosei University Repository

も重要なファクターのひとつとなる。その事情は、ドイツ人にとってであれ、ユダヤ人にとってであれ、変わりがないだろう。もちろんユダヤ人には、国民国家を形成するために不可欠な「領土」が、決定的に欠落しているという違いはあるにしても。ドイツ国民国家に対抗して、ユダヤ国民国家を樹立するなどということに、ハイネの意図が向かっているのでない限り、彼の進むべき道は、国民の物語としての歴史を徹底的に掻き回し、時間軸を惑乱することにあるはずだった。そしてそれは、過去へも未来へも、自由に時間を跳び移ることができる、観念連合的手法によってこそ可能だった。だが、彼が惑乱すべき対象は、時間軸にとどまらない。自らの故郷と呼んでよい地域を舞台にした小説が挫折し、紀行文において成功したことは、象徴的である。一定の場所に根を下ろし、そこに生育したという神話も、「国民」の観念を形成する要素のひとつである。紀行文において彼は、ひとつの場所にとどまることなく、常に動き続ける。しかも彼は、観念連合的手法によって、一瞬のうちにギリシアへであろうと、中国へであろうと、移動することが可能なのである。この空間軸の惑乱は、国民国家を支える「領土」の観念を、突き崩すことにつながるだろう。ハイネの、しばしば主観的と評されてきた文体は、このような惑乱を可能にするための仕掛けだった。

『ハルツ紀行』は、執筆から一年後に「ゲゼルシャフター」誌に掲載されたのち、さらに手を加えられて、一八二六年五月、「帰郷」を構成する八十八の詩篇と、さらに「北海」第一部の詩群とともに、『旅の絵』第一巻として出版され、爆発的成功を博する。これによって彼は、一躍人気作家の地位を獲得する。版元であるカンペは、この成功に気を良くして、続篇の執筆をハイネに求め、結局シリーズ化された『旅の絵』は、一八三一年一月までに四巻を数えることになる。職業作家ハイネの誕生である。だがここで問題となるのは、時間軸を惑乱して、物語られるものとしての歴史の観念を打ち壊し、空間軸を惑乱して、根付くべきものとしての領土の観念を突き崩す彼の作品、つまり国民国家の神話を挑発する彼の作品が、なぜドイツ国民に喜んで迎えられたのか、ということである。その答えの在処は、彼の作品の読者が、実はドイツ国民などではなかった、という仮定に求めるほかないだろう。「国民」は、実体ではない。それは、どこにも居ながら、どこにも居ない存在であり、ひとつの浮遊する観念であ

Hosei University Repository

る。その観念と一致していると信じることが可能な間は、誰しも皆自分が国民だと思い込んでいるのだが、何かのきっかけでそこに齟齬が生じると、「国民」は彼からたちまち逃げ去ってしまう。「国民」の観念と齟齬をきたし、それと利害対立すると見なされた者は、たとえば現代の日本では、しばしば「住民」と呼ばれている。ユダヤ人であろうとなかろうと、生身の人間は全て、「国民」から排除されている。ある意味で「ユダヤ人」とは、「国民」観念を剝ぎ取られた、裸の人間の謂にほかならない。ハイネの詩や散文に心ひかれた人々は、そのような裸の人間だったに違いない。(続)

《注》

(16) HSA Bd. XXI, S. 58.
(17) Cf. DHA Bd. XV, S. 75.
(18) Cf. DHA Bd. XI, S. 14ff.
(19) Cf. J.-Chr. Hauschild und M. Werner: »Der Zweck des Lebens ist das Leben selbst« Heinrich Heine. Eine Biographie. Köln 1997, S. 36.
(20) Cf. DHA Bd. XV, S. 62.
(21) DHA Bd. XV, S. 61.
(22) Hauschild u. Werner: a. a. O., S. 47.
(23) HSA Bd. XX, S. 22.
(24) DHA Bd. III, S. 396.
(25) Marcel Reich-Ranicki: Der Fall Heine. Stuttgart 1997, S. 89.
(26) DHA Bd. VI, S. 222.
(27) E.Galley und A.Estermann (Hg.): Heinrich Heines Werk im Urteil seiner Zeitgenossen. Hamburg 1981 ff. Bd. I, S. 35.
(28) DHA Bd. VI, S. 62.
(29) Cf. Hauschild u. Werner: a. a. O., S. 79.
(30) HSA Bd. XX, S. 97.

Hosei University Repository

(31) Cf. Hauschild u. Werner: a. a. O., S. 99.

(32) それは、歴史との接点を奪われたユダヤ人が、再び自分の側に歴史を奪い返そうとする、試みなのだろうか。あるいはそこに、自らの「主観的」文体による、歴史の惑乱への意志を、読み取るべきかもしれない。

(33) Cf. DHA Bd. V, S. 550.

(34) HSA Bd. XX, S. 113.

(35) Cf. Michael Werner (Hg.): Begegnungen mit Heine. Berichte der Zeitgenossen. Hamburg 1973, Bd. I, S. 128.

(36) DHA Bd. VII, S. 116.

(37) HSA Bd. XXI, S. 138.

(38) HSA Bd. XXI, S. 371.

(39) HSA Bd. XX, S. 208.

(40) HSA Bd. XX, S. 215.

(41) DHA Bd. VI, S. 134.

(42) HSA BD. XX, S. 227.

(43) HSA Bd. XX, S. 234.

(44) HSA Bd. XX, S. 176.

(45) HSA Bd. XX, S. 192.

(46) HSA Bd. XX, S. 203.

(47) DHA Bd. V, S. 145.